

シリーズ第34話

子宮頸がんの予防接種

子宮頸がんは、発がん性のヒトパピローマウイルス（HPV）の感染が原因で子宮の入口にできるがんです。HPVは多くの場合、自然に排除されるのですが、排除されなかった一部のウイルスの感染が長期間続くと、子宮頸部の細胞が異常な形態（前がん病変）となり、さらに前がん病変の一部が、がん細胞へと変化します。

HPVは100種類以上あり、その中でも女性生殖器関連のHPVは40種類前後あります。そのうち、発がん性のものは10数種類となっています。発がん性HPVは性交渉によって感染しますが、性交経験のある女性の約8割の方が一生のうち一度は感染するといわれているほど、ありふれたウイルスです。子宮頸がんは幅広い年代の女

性にみられますが、特に最近では20代から30代の方に急増しています。

もし、子宮頸がんになっても、はじめのうちは自覚症状がないため、自分ではなかなか気づくことができません。また、HPVは一度排除されても、何度でも感染するため、定期的に検診を受けるなどして早期発見に努めることが大切です。ごく初期の段階で見えれば、多くの場合、子宮を温存することができますが、進行すると子宮全体の摘出や放射線治療、薬を使った治療も必要となり、妊娠や出産に影響を及ぼします。

従来、日本における子宮頸がんの予防には定期的な検診以外ありませんでした。海外ではすでに100カ国以上でワクチン接種による予防策がとられていま



新城市民病院
婦人科
診療部長 出向洋人

したが、日本では近ごろようやくワクチンの販売が許可されたところですが、このワクチンを接種することで、発がん性HPVのうち、子宮頸がんから多く見つかるとHPV16型と18型の2種類の感染をほぼ100パーセント防ぐことができます。ワクチンの効果は現時点で7年程度は確認されていますが、今後の経過観察によりさらに延長されるものと期待されています。

ワクチンを接種したからといって絶対に子宮頸がんにならないというわけではありません。ワクチンで予防できないウイルスもありました。また、すでに感染しているHPVを排除したり、すでに発症している子宮頸がんや前がん病変の進行を遅らせた、治療したりすることができ

子宮がん検診は必要なのです。子宮頸がんは、予防接種と定期検診で予防することができます。予防接種は、まだ感染の可能性がない（性交経験がない）10歳以上の方が最も効果が高まります。性交経験があるからといってワクチンの効果が期待できないというものではありません。HPVは何度も感染するため、予防接種で次の感染を防ぐことができます。

予防接種は、1回目を接種してから1カ月後と6カ月後の計3回行います。3回接種することで十分な効果が発揮されるため、キチンと最後まで接種することが重要です。ワクチンの販売開始から日が浅いため、医療機関によっては取り扱っていないこともありますので、接種を希望される方は事前に医療機関へ確認することをお勧めします。なお、市民病院では2月から予約制で実施しています。保険が適用されないため、料金は3回分でおよそ4万3千円です。詳しくは婦人科外来までお問い合わせください。